

3-2					
主題	都市で暮らす認知症で独居の高齢者				
副題	ご本人と家族の気持ちの距離を近づけたい				
キーワード 1	認知症で独居の高齢者	キーワード 2	気持ちの距離	研究(実践)期間	18ヶ月

法人名・事業所名	(株) ヴェール 憩いの里いけぶくろ
発表者(職種)	加藤拳也(主任介護支援専門員)
共同研究(実践)者	なし

電話	03-5985-7300	FAX	03-5985-7400
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	憩いの里いけぶくろは豊島区池袋に平成 17 年 10 月 1 日、通常規模の通所介護施設として開設。平成 27 年 4 月 1 日に居宅介護支援事業所を開設。池袋駅を中心に広がる繁華街やテーマパーク、レジャー施設、芸術劇場が立ち並び、人の往来が多い。大都市の中で高齢者が住み慣れた街で、心豊かに暮らしていける支援ができる事業所を目指している。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

超高齢社会となり高齢者の一人暮らしが増加。地域には 1990 年代～2000 年代初頭に建てられた大規模多機能型マンションに暮らす独居高齢者、老々介護、認認介護世帯が増加。高度なセキュリティーや、居住ルールの変化に対応して暮らすことが困難なケースが見受けられる。その状況を支える大きな役割を地域の居宅介護支援が担っていると認識。在宅で生活をしていくうえで重層した阻害因子を抱え、解決が難しい方の受け入れを積極的に行っている。歩んでこられた生き方でそれぞれの現在があることを知る。これからの生活を良くしていくために必要なことは何か。本人の在りのままを受け止め尊重し、備えているストレングスを見出し、本人と家族の関係性が良くなっていくような支援を実践することで、その方らしく地域での生活が営めることを提示している。

2021 年末、慢性腎不全により入院加療を経て退院される独居男性の支援を管轄の地域包括支援センターより受け入れ。家族とは絶縁状態。唯一県外に住む長男と繋がっているが、遠方でありコロナ禍で県を跨いでの来訪が不可。生後間もない子供がおり、仕事も多忙。重要な点として親子間に過去からの深い確執がある。入退院の手続きなど必要最小限の援助を行って以降の関りはない。中重度の認知症のため内服薬の遵守、皮下注射、金銭管理、食事の提供、施錠開錠、高度なセキュリティーに対応したインターフォンの操作など、ご自身ができないと住むに困ることが多々あり。在宅復帰にあたりマンション管理側、民生委員から戸惑いや不安の声も多かった。長男からの援助がなければ在宅での生活が成立しない状況。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

フォーマルなサービスや地域に住む人達や活用できる資源を結び付け、地域の中でいきいきと生活していけることを目的とした。その姿を長男と共有していくことで、本人との気持ちの距離が近づくと仮説。

《3. 具体的な取り組みの内容》

本人が信頼する地域の民生委員へ月 1～2 回の訪問を依頼。不安なことや関心ごとを伺っていただく。

マンション管理人が危惧されていることを伺う。危険因子として調理コンロは本人の安全と、マンション住人に配慮し使わないようにした。セキュリティーの誤作動防止のため必要最小限のボタン以外に触れないよう工夫。本人と施錠開錠の反復練習を行った。訪問診療による受診、検査、訪問看護による週 1 回の状態確認と皮下注射の遵守のため、医療者の介入が在宅へ戻る要件であると本人へ伝え了承を得ている。インテークでは民生委員、地域包括支援センター職員、ケアマネジャーによる最小限での訪問を行い本人との信頼関係を築くようにした。腎不全、糖尿のため食事内容の検討が急務であるが病識がない。宅配弁当や、ヘルパーの食事に関する援助の提案は頑なに拒否。出来ないところは手伝ってもらうことが必要なことを理解いただくため、話し合いを根気強く行った。ケアマネジャーから長男へ月 1 回電話。民生委員、マンション管理人、医療者、ヘルパーによる目標への取り組み状況や、本人が長男に対して思われている本心「遠くに住んで自分で家を建てて家庭を作って大したもんですよ。」など、何気なく言葉にされた本人の素直な気持ちをそのまま伝える。尚、郵便物に関しては本人と一緒に確認した後、長男へ郵送。医療や介護サービスの費用、生活費、マンション管理費など金銭に関することを把握していただく。

《4. 取り組みの結果》

身体状況として服薬と皮下注射の遵守が達成されており、状態は安定。HbA1c が 7.9%→6.7% に改善。食糧品の購入に関しては医師のアドバイスを受けながら検討。検査データは長男を含め支援チームで共有。数値化されたデータを本人、長男が目にすることで医療や介護サービスによる効果を実感されている。長男より「リハビリの導入はどうでしょうか」など、計画に対して提案されるようになった。他者の援助を拒む理由やお互いの確執の原因を、本人と長男の双方から聴けた。医療、介護サービス事業所、さらに民生委員やマンションの管理人から情報を共有することにより、課題を早期に把握し長男を交えて支援の方法や将来的な生活の場など、前向きに考えられるようになった。

《5. 考察、まとめ》

本音をいえば、予測がつかない大変困難と思われる支援だった。しかし民生委員、マンション管理人、包括、専門職がそれぞれの役割を担い、絶え間なく連携をしていくことで、本人の心身の状況や生活サイクルが安定。他者との関わりに拒否的であった気持ちが緩解。笑顔が増え、周囲へ感謝の言葉まで聴けるようになった。長男の変化として、本人を気にかけて電話されることが多くなり、お孫さんの写真を郵送するなど、徐々にではあるが本人と長男の気持ちの距離が近くなっていることを感じる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「独居高齢者が抱える問題とその背景、それを解消するには何が必用か」 2017年7月12日
桜美林大学大学院老年学研究科教授 杉澤 秀博 教授 (2023年6月15日閲覧)

URL www.tyoju.or.jp/net/topics/koreisha-kouritsu/dokkyokoreisha.html

《8. 提案と発信》

都市で暮らす認知症で独居の高齢者を支援する特徴として、個人情報やプライバシーを重要視する昨今、特に大規模多機能型マンションのような箱型住宅の集合体では、お互いの生活に対して干渉することを拒絶する傾向を感じる。しかし、子供が独立し家を出て本人も歳をとって身体が思うように動かなくなり、配偶者との死別や同年代の仲間が次々にいなくなり、生きる意欲が持てなくなるときが来るのが現実である。適切なフォーマルサービス、地域資源を活用することも必要だが本人の人生の中で、一番大切な人は家族ではないだろうか。過去に戻ることは不可能であり、残された時間は決して多くないが、家族との気持ちの距離を近づけていくために、何が出来るか考えることを諦めずに実践していく。